

シンポジウム1：臨床検査の未来を拓く人材の育成

2. 卒前教育

戸塚 実*

[Key Words] 人材育成、動機付け、基礎知識・技術の習得、自己学習能力の育成

はじめに

始めに臨床検査学教育の目的について考えてみたい。高度医療における臨床検査の担い手の育成、臨床検査技術の発展に貢献できる研究者の育成、高度な臨床検査を発展的に継承するための教育者の育成の3つに大別されると思われる。しかも、これらの異なる人材の育成が、「臨床検査」あるいは「臨床検査技師」というキーワードで有機的につながっていることが求められる。そのような背景のもと、教育体制も大きく変わってきた。4年制大学が増加傾向にあり、専門学校は大幅に減少した。4年制大学には博士(前期)課程を併設しているところも増えており、国立大学法人の全てで博士(後期)課程も併設されている。臨床検査に関わる人材育成において、これらの教育施設の役割が異なることは当然であるが、臨床検査技師という国家資格を有する人材を育成するという点では共通である。教育年限は3~4年、博士(前期)課程に進学しても6年、博士(後期)課程への進学者数はさほど多くないことを考慮すると、平均修学年限は4年程度ということになる。人生80年以上の現在、40年以上勤務するのが当たり前になりつつあり、その基礎教育、すなわち卒前教育

の4年という年限は決して長いとはいえない。しかし、特に生涯臨床検査関連の職業に就く方にとっては、長い人生のスタートとして極めて重要な期間である。他の学問分野と同様、臨床検査学も領域が広く奥が深い学問であり、全てを4年で完全にマスターすることなど不可能である。また、医学分野の進歩は目覚しく、それに対応するためには一生涯の学習が要求される。すなわち、卒前教育は基礎知識・技術の習得という臨床検査技師としてスタートするための最低限の教育はもちろんのこと、生涯自己学習を継続していく能力を育成することが重要である。合わせて先に述べたように、技術者・研究者・教育者の有機的なつながりによって臨床検査領域の発展があると考えられるなら、臨床検査の専門家という identity を築いていく動機付けが極めて重要なように思う。

I. 動機付け

スポーツを例に考えてみよう。サッカー少年、野球少年が目指すものは、それぞれサッカー選手、野球選手である。しかし、基礎トレーニングはいずれの種目においても重要である。ランニングや筋力トレーニングをしている少年をみて、サッカー選手あるいは野球選手のいずれを志しているか

*東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 mtozuka.alc@tmd.ac.jp
日本臨床検査学教育協議会 理事長

は不明であるとしても、目指しているものが重要であることは容易に想像がつく。学問の分野も同様であり、ライフサイエンス系の教育施設では教育・研究において共通する部分は多いと思われる。すなわち、教育や研究の充実が重要であることは間違いのないことであるが、何を目指してその学習・研究に取り組んでいるのか、教育の中での動機付けがきわめて重要であるように思われる。特に、臨床検査の分野は、臨床検査の専門家による研究あるいは教育ということを考えると、まだまだ過渡期にあると考えるべきであり、動機付けの重要性は一層である。

II. 基礎知識・技術の習得

臨床検査技師養成施設における技術教育の重要性は昔も今も変わりはないが、臨床検査は日進月歩で進化しており、教育もそれに応じて変わっていかなければならない。ある特定の臨床検査ができるようになり、卒業後に即戦力として働けることを、必ずしも目指しているわけではない。基礎技術の習得と応用力の育成によって、自ら更なる技術習得が可能な教育が必要である。また、その技術は単なる手技としての技術ではなく、臨床検査学の知識の上に成り立っているものでなければならない。

近年、臨床検査技師にも病態解析能力が求められるようになってきている。高度な機械化、自動化が進んでいる現状では当然必要なことであるが、臨床検査そのものの技術や理論の修得なくして、臨床検査技師の病態解析が臨床において有用である必然性がないことは肝に銘じておきたい。

III. 自己学習能力の育成

先にも述べたように、卒前教育は導入教育に過ぎない。一人前の臨床検査技師として生きていくためには、卒業後の教育あるいは自己学習が不可欠である。極端に言えば、卒前教育は卒業後に実

践を通じて自ら学んでいくための基礎能力の育成が目的であるといってもいい。与えられた課題を解き明かしていくスタイルの教育は高等学校までの教育で十分経験してきている。大学においては、さらに高度な技術や知識を教授していくことも必要であるが、自ら課題を発見し、それを解決していくというプロセスを踏んでいける資質の育成が何よりも重要ではないだろうか。

以上、卒前教育について述べてきたが、前述のように臨床検査学の卒前教育施設は3年制の専門学校から4年制大学、大学院と幅広い。その多様性は教育の多様性を意味している。臨床検査技師育成の根幹に関わる教育、すなわちコアになる共通教育事項は明確にされていなければならないが、臨床現場の臨床検査に限らず、広く臨床検査分野の専門家として社会に貢献できる人材を育成していくことを目指すべきであると考えられる。また、あえて人材育成という表現を用いたが、卒前教育に求められるのは、臨床検査分野において欠かせない人材に成りえる素養を備えた「人材の卵あるいは雛」を育成しているといっていかもしれない(表)。すなわち、適正な卒後教育無くして、有能な人材が育つはずは無いと言える。教育・研究機関に限らず、診療所や病院等の検査室やその他の臨床検査実践現場が、教育あるいは研究の場としてもいかに重要であるかということを示唆している。

表 臨床検査学卒前教育の目的

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 高度医療における臨床検査の実施
専門医療技術者の卵あるいは雛の育成 2. 臨床検査技術の発展
研究者の卵あるいは雛の育成 3. 高度な臨床検査の発展的継承
教育者の卵あるいは雛の育成 |
|--|